

研究所年報 巻頭の言葉

平成 17 年 10 月 1 日、富山大学、富山医科薬科大学、高岡短期大学の三大学は統合し、新しい富山大学が新生した。この機にあわせ和漢薬研究所も和漢医薬学総合研究所と改名し、その開所式には記念講演会も開催し、研究所教職員、大学関係者、一般市民も参加して新しい研究所の発足を祝うことが出来た。新しい研究所はこれまでの理念であった「和漢薬に関する学理及びその応用研究」に留まらず、漢方医薬学の世界的拠点となるべく「先端科学技術を駆使して伝統医学、薬物を科学的に評価し、東洋医学と西洋医学の融合した新しい医薬学体系の構築と自然環境の保全を含めた全人医療の確立に貢献する」使命を掲げた。その背景には、西洋医学の著しい発展にもかかわらず、伝統医学、代替医療が世界的に見直され東西医学の融合（統合医療）が世界的風潮になり、より医療と直結した研究の重要性が増してきた事にある。国民の健康・福祉を目指した実学的研究への静かなる移行である。

和漢薬研究所は設立当初から、医療に結びついた研究体制を指向していたが、富山医科薬科大学附属病院内に和漢診療部を立ち上げたことで臨床部門を設置するという所期の目的を果たすことができた。やがて、医学部内に和漢診療学講座、また研究所内には漢方診断学寄附部門が設置され、富山医科薬科大学の建学の理念となる東西医薬学融合の基盤が整ったことになる。本年 9 月 30 日をもって富山医科薬科大学は 30 年の歴史の幕を降ろし、この医療改革の流れは新しい富山大学に引き継がれる事になった。

和漢薬研究所は和漢医薬学総合研究所への移行を前に、研究部を少講座制から大講座制に変えたり、教授、助教授、助手の任期を一律 5 年にし、業績評価を踏まえた再任制度を導入したり、採用にあたっては全ての教員を公募制にするなど、組織、運営面での改革を行ってきた。また、薬効解析センター（研究所附属施設）の名称を民族薬物研究センターに改め、その下部組織に薬効解析部、外国人客員部、国際共同研究部、民族薬物資料館を置くなどセンターの機能を分かり易くすることに努めてきた。

研究所の 1 年間の成果も着実に増え続け、研究所年報作成への財政的負担も無視できなくなっている。今回、松本欣三教授の提案で持ち寄った原稿をオフセット印刷で作成する事になり、前回までの装丁と若干差異があると思うが、この間の事情をご理解願いたい。

平成 17 年 12 月

和漢医薬学総合研究所 所長 服部 征 雄